

## 六方礼経

### 六方礼経について

このお経は、世尊（お釈迦さま）が資産家の子、または、地主の子、長者の子といわれるシンガーラ（シンガーラカ）（Singāla）に説かれた教えです。

パーリ語経典ならびに、漢訳経典が有り、大正大蔵経に4種納められています。しかし、その内容は同一ではありません。

南方仏教では、在家生活の規範として尊重され、「この経典の教えを聞いて、教えられたとおりに実行するならば、繁栄のみが期待され、衰退はあり得ない」と、五世紀の大仏教学者ブッダゴーサもいわれています。

人と人が関わっていく社会の中で、2千年以上前に書かれた世尊の教えが、今日の社会でも斬新に聞こえることは、文明の進歩と、人間の進歩とは別であると改めて感じます。

### 原始仏典について

原始仏典では、今日、日本で拝まれている仏様や菩薩様は出てきません。仏様や菩薩様は、大乘仏教と共に発展してきました。私たちは、世尊生前の時代から、紀元後6世紀までの約千年間のインド仏教学、インド史に触れることはほとんどありません。

大乘仏教は、西暦1世紀頃インドで起こりました。今日の日本は、その大乘仏教が主流となり、日本仏教を構築しています。仏教は、時代の流れにより多様化し、時代に合わせて広がっていきました。このお経は、大乘経典が生まれる前の教えです。

原始仏典 中村元 筑摩書房 418頁

「この経典によると、資産者の子であるシンガーラが亡き父

の遺言に従って六つの方角を崇拝していたが、釈尊はそれに対して、人間としての正しい倫理を実践することが、六の方角を崇拝する儀礼の真の趣意にかなっているということを説き明かしたのである。

総じてゴータマ・ブッダのすべての教訓を通じて認めうることであるが、かれは従前から行なわれていた宗教儀礼や習慣を頭から排斥するというをしななかった。かれはそれらをいちおう名目的には承認し、その上で新しい解釈を与え、あるいは忘れられていた本来の趣旨をとりもどし、実質的内容的にそれを改革したものである。たとえば、儀礼としての祭祀を行なうのは真の祭祀ではなくて、人としての正しい道徳を守ることが真の祭祀であるというような説きかたをする。この根本的な態度はアショーカ王にも顕著に継承されているが、その態度がいまここにも見られるのである。」

世尊の教えは、人は苦しみ少なく生きるために、どうすればよいか。ひとり一人に対し世尊は、対機説法で対応されました。頭の痛い人には頭の対応、お腹が痛い人には、お腹の対応、怪我をした人には怪我の対応という具合です。

また、原始経典は、仏教論理学に基づいて書かれています。それは、AとBがある場合、

- ① Aが真である。
- ② Bが真である。
- ③ AとBが真である。
- ④ AとBが偽である。

このようなルールで経典が書かれているため、私たちには、読みにくい文章に感じます。また、オウム返しのように繰り返して会話をします。このルールを知って原始経典に接することが、原始経典を理解する重要なポイントです。

十四無記を例に見ると、十四無記は、釈尊がこの問いに対して、是とも非とも答を与

えないこと。外道からの十四の問詰、問難、即ち十四難に対して、仏陀は、それに答えることは意味がないとして、是とも非とも答えなかった。これを十四無記（十四不可記）といい、四記答のうちでは捨置記（しゃちき）にあたる。

十四の問難とは

- ①世界（および我）は常（時間的に無限）であるか
  - ②無常（時間的に有限）であるか
  - ③常にして無常であるか
  - ④常でも無常でもないか
  - ⑤有辺（空間的に有限）であるか
  - ⑥無辺（空間的に無限）であるか
  - ⑦有辺にして無辺であるか
  - ⑧有辺でも無辺でもないか
  - ⑨如来（ここでは衆生を意味する）は死後に有であるか
  - ⑩無であるか
  - ⑪有にして無であるか
  - ⑫有でも無でもないか
  - ⑬命（靈魂）と身とは同一であるか
  - ⑭異なるか
- である

以上の中で③④⑦⑧を除いて四類十問に数える場合もあります。

（総合仏教大辞典）

このような形式で、原始仏典が説かれている場合があります。

もう一つは、

- ①これがあるときかれがある
- ②これが生ずるからかれが生ずる
- ③これがないときかれがない
- ④これが滅するからかれが滅する

『サンユッタ・ニカーヤ』

例としては

生があるところに滅がある  
生じたものには変化が生ずる  
生がなければ滅はない  
生じなければ変化はない

心があらゆる方角にさまよいいくとも  
自己より愛しいものにたどり着くことは決してない  
同じように他の人々にとっても自己は非常に愛しい  
それだから自己を愛しく求めるものは他を害してはならない  
『サンユッタ・ニカーヤ』

論理学は、日本では因明といわれ、古くから研究されてきました。

論理の構造 上 中村元 49頁

「日本人は抽象的思索に弱い、とか、「ことあげせぬ国」であるとか言われている。しかしやっとな『古事記』が編集され万葉の歌が詠まれていた時代に、奈良の因明学者たちは「知覚」（現量）だとか「推論」（比量）だとかいう難解な問題に真剣に取り組んでいたのである。カント哲学で本式に取り上げられるに至った二律背反の問題が、すでに奈良の因明学者たちによって「相違決定」という名のもとに論ぜられていたと言うなら人は本気にしないかもしれないが、これは本当である。誤謬論の検討は日本の因明学者たちが心血を傾倒したものであった。」

と、記されています。

先学の智慧を再考し、仏教や東洋思想が八世紀までに構築した原始仏典、中観、唯識、因明等のさまざまな教えが、多くの方々に知られる時代が来ることを願います。世尊の教えが広く世間に広まることを念じます。

# 六方礼経

このように私は聞きました。

あるとき、世尊（お釈迦さま）は、ラージャガハ（王舎城）に近い竹林精舎のカラ ندا カニ ヴァー パ 僧院に住んでおられました。

そのころ、長者の子シンガーラは、早朝に起き、ラージャガハを出て、沐浴して衣服を清め、髪を清め、合掌して、東方、南方、西方、北方、下方、上方の各方角を礼拝していました。

\*からんだ【迦蘭陀】kalandakaの音写。

マガダ国の王舎城の外にある竹園を釈尊に奉った長者の名。迦蘭陀竹林（kalandaka-nivāsa）は迦蘭陀鳥（その形は、鵲かささぎに似て群集して竹林に住むという）の住む竹園の意で、マガダ国の首都、王舎城の北にあり、世尊がしばしばそこに住して説法した。

南方仏教では、カラ ندا をリスと訳し、リスの餌場と言われる。

（広説佛教語大辞典）

さて、世尊がラージャガハへ托鉢に入られたとき、長者の子シンガーラが、早朝に起き、ラージャガハを出て沐浴して、衣服を清め、髪を清め、合掌し、東方、南方、西方、北方、下方、上方の各方角を礼拝しているのをご覧になられ、こう言われました。

「長者の子よ、あなたは どうして、早朝に起き、ラージャガハを出て沐浴して、衣服を清め、髪を清め、合掌して、東南西北下上の各方角を礼拝しているのですか」と。

「世尊よ、父が亡くなるときに、私に言いました。『お前は、

諸方角を礼拝するがよい』と。世尊よ、そこで、私は、父の言葉を尊敬し、尊重し、敬愛し、供養し、早朝に起き、ラージャガハを出て沐浴して、衣服を清め、髪を清め、合掌し、六方の各方角を礼拝しております」と。

「長者の子よ、<sup>\*</sup>聖者のきめられたことにおいては、そのように六方を礼拝すべきではありません」と。

「世尊よ、それでは、聖者のきめられたことにおいては、どのように六方を礼拝したらよいでしょうか。世尊よ、どうか私に、どのように六方を礼拝したらよいか、聖者のきめられたことをお説きください」

「それでは、長者の子よ、話しましょう、よく聞いて、よく考えなさい。」

「かしこまりました、世尊よ」と、長者の子シンガーラは世尊に答えた。世尊はつぎのように言われた。

#### \*しょうじゃ 【聖者】

尊い人。宗教的にすぐれた人。仏教における 聖なる弟子。

世尊としては、人としての正しい道を守ることを考え行動する人。

「長者の子よ、聖なる弟子は四つの業垢（<sup>ごうく</sup>苦しみを生む悪い行い）が捨てられています。かれは四つの理由によって悪業を作ることがありません。

また、六の財の破滅門に親しむことがありません。このように、かれは、十四の悪事から離れ、六つの方角を保護し、この世界もかの世界もかれに平定されることになります。かれは身体が滅ぶと、死後に良い天界に生まれます。」と。

## 四つのけがれ

「かれは四つの業垢（苦しみを生む悪い行い）を、捨て去っています。

長者の子よ、

①<sup>\*</sup>殺生は業垢です

②<sup>\*</sup>偷盗（盗み）は業垢です

③<sup>\*</sup>邪淫は業垢です

④<sup>\*</sup>妄語（嘘をつくこと）は業垢です

これらの業垢は捨てられています」と。

このように、世尊は言われた。

「殺生、偷盗、そしてまた他人の妻と通じること、さらに妄語、と言われるものを賢者たちは称赞しない」と。

## 悪業をつくることのない四つの理由

「どのような四つの理由によって、かれは悪業を作ることがないのか。

①欲によって非道を行く者は、悪業を作ります

②怒りによって非道を行く者は、悪業を作ります

③愚かさによって非道を行く者は、悪業を作ります

④恐れによって非道を行く者は、悪業を作ります

長者の子よ、聖なる弟子は、

①欲によって非道を行くことはありません

②怒りによって非道を行くことはありません

③愚かさによって非道を行くことはありません

④恐れによって非道を行くことはありません

そのため、これら四の理由によって、悪業を作ることがありません」と。

このように、世尊は言われた。さらに師はつぎのように言われた。

「貪欲、怒り、恐れ、愚かさにより  
法を犯すことがあれば  
その名声は欠けてゆく  
あたかも黒分\*の月のように

欲、怒り、恐れ、愚かさにより  
法を犯すことがなければ  
その名声は満ちてゆく  
あたかも白分の月のように」  
と。

\*せつしょう 【殺生】

生き物を殺すこと。いのちあるものの生命を殺害すること

\*ちゅうとう 【偷盜】 他人の財産を盗むこと

\*じゃいん 【邪淫】

よこしまなこと。夫または妻でない者に対して、よこしまな行為をすること。よこしまな姪事。道にはずれた姪姪。また自分の夫または妻であっても、不適當な方法・場所・時間に行うことも含まれる。欲邪行（欲望に関するよこしまな行い）ともいう。

\*もうご 【妄語】 うそをつくこと。うそを言うこと

\*こくがつぶん【黒月分】太陰暦の下半月（満月の次の日から新月まで）をいう。白月分（新月の次の日から満月まで）の対。

（広説佛教語大辞典）



## 破滅に至る六つの理由

どのような六つの財の破滅門に、かれは親しむことがないのか。

長者の子よ、

I 飲酒をし、乱暴の原因となるものにおぼれることによる、六つの災難が起こる。

- ①実際に財産を失う
- ②口論をすることが増える
- ③病気が起こる
- ④悪評が流れる
- ⑤陰部を露出する
- ⑥智慧が減退する

飲酒をし、乱暴の原因となるものにおぼれることによる、六つの災難である。

II 夜中に外をふらつく者には、六つの災難がある。

- ①彼自身が護られない
- ②妻子が護られない
- ③財産が護られない
- ④悪事に対して疑われる
- ⑤虚言が多くなる
- ⑥多くの苦法が続いて起こる

これらが夜中に外をふらつく者の六つの災難である。

III 見せ物等の歌舞祭礼に魅せられて遊び廻るに六つの災難がある。

- ①舞ひは何處にある
- ②歌は何處にある
- ③音楽は何處にある

④講談は何處にある

⑤鼓は何處にある

⑥太鼓は何處にある

家主の子よ、これらが歌舞祭礼に遊び廻るの六つの災難である。

IV 賭博という勝手気ままでしまりのないことの原因におぼれると、六つの災難がある。

①勝てば相手に恨まれる

②敗けて悲しむ

③現実に財産をすり減らす

④法廷に立っても彼の言葉は信用されない

⑤友に軽蔑される

⑥結婚したい人からは拒絶され、妻を持つ資格が無いといわれる

賭博をこととするものは妻子を十分に養ふことが出来ない。長者の子よ、これらが賭博という勝手気ままでしまりのないことに、おぼれることの六つの災難である。

V 悪友に交るに六つの災難がある。

①賭博をする者

②泥酔者

③欲深い者

④嘘偽りをいう者

⑤人目をあざむき、だます者

⑥慈しみの心を持たず、残虐な行いを平気でする者が彼の友となり、仲間となる

長者の子よ、これが悪友に交るの六つの災難である。

VI すべきことをなまけて、だらしないことにおぼれることに六つの災難がある。

- ①『あまりに寒い』といつては仕事をしない
- ②『あまりに暑い』といつては仕事をしない
- ③『あまりに遅い』といつては仕事をしない
- ④『あまり早い』といつては仕事をしない
- ⑤『あまりに空腹である』といつては仕事をしない
- ⑥『あまりに満腹である』といつては仕事をしない

このように行わなければならぬことを、なまけていては、未だ生じない富は生ぜず、既に生じた富も失うことになる。これが怠惰<sup>たいだ</sup>におぼれる六つの災難である」と。

長者の子よ、怠惰におぼれるならば、これら六の危難があります。

このように、世尊は言われた。<sup>\*</sup>善逝はこのように言われ、さらに師はつぎのように言われた。

\*ぜんぜい【善逝】 sugata（修伽陀と音写）の漢訳。逝は行く、赴くの意。よく（さとりの境地・彼岸に）行った人。よく（真理を一了解した人。しあわせな人。幸福な人。立派に完成した者。よくさとりに到達した人。仏のこと。仏の十号の一つ。智慧の力で煩惱を断じ、その最後の結果に到達し、彼岸に去って再び生死界に退没することのない人という意で、こういふ。

（広説佛教語大辞典）

さいころ遊び、飲酒、他の妻女と交わり、卑しい者と交わり、知識や経験あるものと交わらなければ、月が欠けるように、財産も信頼も欠けていく。

昼に眠り、夜に出歩き  
常に泥酔する者は  
水に沈むように負債に沈み

家を維持することはできない。

寒すぎる、暑すぎる、遅すぎると言って  
仕事を放棄する人には利益が去っていく

この世において寒い、暑いと  
草ほどにも思うことなく  
人の用事を行なうならば  
かれは楽を失うことなし。

私たちは、自分自身のところをコントロールできないことに悩みます。何かを行おうとしても、長続きせず、ころころ変わる自分のところに翻弄されます。ころころは刹那に変わると言われます。つつい油断すると、楽な方へと怠け心が働きます。少しの間も定まらないころ、あわてずに精進しましょう。

せつな【刹那】 kṣaṇa の音写。念・念頃と漢訳する。きわめて短い時間。瞬間。最小限の時間。一説によると、勇者の一弾指中に六十五刹那を計算する。ゆえに一弾指時の六十五分の一を刹那とするともいう。時間の最も短い単位。

(広説佛教語大辞典)

1 刹那を 75 分の 1 秒とするものもある。

(仏教が生んだ日本語)

## 友のように見えて 友でない者

「長者の子よ、つぎの四つは友ではなく、敵であって友に似た者と知るべきです。

- ①何ものでも取ってゆく者は友ではない
- ②言葉だけの人は友ではない
- ③甘言を語る者は友ではない
- ④放蕩の仲間が友ではない

I 長者の子よ、四つの理由によって、何ものでも取って行く者は友ではなく、敵であって友に似た者と知るべきです。

- ①何ものであれ取っていく者
- ②少し渡して多くを求め取っていく者
- ③恐れのために用事を行ない、進んで行かない者
- ④自分の利益のみのために親しむ者

長者の子よ、これら四つの理由によって何ものであれ取ってゆく者は敵であって友に似た者と知るべきです。

II 長者の子よ、四つの理由によって言葉だけを大事にする者は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです。

- ①過去のことによって友情をよそおう者
- ②未来のことによって友情をよそおう者
- ③実現不可能な架空のことによって取り入る者
- ④成すべきことが迫ると、都合が悪いという者

長者の子よ、これら四つの理由によって言葉だけを大事にする者は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです。

III 長者の子よ、四つの理由によって甘言を語る者は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです。

- ①悪事であってもかれに同意する者
- ②善事であってもかれに同意しない者

③その人の前ではかれを称賛する

④その人がいなければかれを非難する

長者の子よ、これら四つの理由によって甘言を語る者は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです。

IV 長者の子よ、四つの理由によって破滅させる仲間は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです。

①飲酒という怠惰な原因となるものにおぼれる仲間である

②深夜に道路を歩き回る場合の仲間である

③見せ物に魅せられて行く場合の仲間である

④賭博という怠惰な原因となるものにおぼれる仲間である

長者の子よ、これら四つの理由によって破滅させる仲間は友でなく、敵であって、友に似た者と知るべきです」と。

このように、世尊は説かれた後、さらにつぎのように言われた。

「何ものでも取ってゆく友  
また言葉だけの友  
また甘言をかたる友  
さらに放蕩に誘い込む友あり

これらの四つは友でない  
このように知り、賢い者は  
かれらを遠くに避けて行く」と。

## 信頼できる善い心の友

「長者の子よ、つぎの四つは善い心の友である。

- ①援助する者は善い心の友である
- ②苦樂を共にする者は善い心の友である
- ③為になることを話す者は善い心の友である
- ④憐れみのある者は善い心の友である

I 長者の子よ、四つの理由によって援助する者は、善い心の友であると知るべきです。

- ①自己を護れない友を保護する
- ②自己を護れない友の財を保護する
- ③恐れている友の庇護者になる
- ④なすべき用事が生じたとき、その二倍の財を与える

長者の子よ、これら四つの理由によって援助する者は、善い心の友であると知るべきです。

II 長者の子よ、四つの理由によって苦樂を共にする者は、善い心の友であると知るべきです。

- ①かれに秘密を告げる
- ②かれの秘密を守る
- ③もろもろの災難に際して、見捨てない
- ④かれのために命さえも捨てる

長者の子よ、これら四つの理由によって苦樂を共にする者は、善い心の友であると知るべきです。

III 長者の子よ、四つの理由によって為になることを話す者は、善い心の友であると知るべきです。

- ①悪に入ることを防止する
- ②善に入らしめる
- ③聞いていないことを聞かせる

④天への道を告げる

長者の子よ、これら四つの理由によって為になることを話す者は、善い心の友であると知るべきです。

IV 長者の子よ、四つの理由によって憐れみのある者は、善い心の友であると知るべきです。

- ①かれの没落を喜ばない
- ②かれの繁栄を喜ぶ
- ③誹謗しているのを止める
- ④称賛しているのを広める

長者の子よ、これら四つの理由によって慈しみのある者は、善い心の友であると知るべきです」と。

このように、世尊は言われた。善逝はこのように言われ、さらに師はつぎのように言われた。

「助けてくれる友  
苦楽を共にする友  
忠訓なることを話す友

情けのある友、  
これらの四つは友であると  
賢者はこのように知り  
敬意をもって親しむがよい

母がわが子をいつくしむように  
規律を持った賢者は  
火のごとく輝く  
蜂のように働き

食物を集めるならば



富は蓄積されてゆく  
蟻塚が高く築かれる  
このように財を集めては  
家長にふさわしい家主となる

財は四つに分けるがよい  
かれは良き友をまとめることができる  
1 / 4 を日々の生活に使い  
2 / 4 を仕事のために使い  
1 / 4 は厄災のために貯蓄をしなさい」

友達とは、キャッチボールのように言葉や気持ちをやりとりします。六方礼経は、ジンガーラの立場で書かれています。ジンガーラの側だけでなく、積極的に行動できる人になることによって、より多くの良き友をつくることができます。良き友に出会うことができれば、充実した人生を過ごし、楽しく実り多い生涯を送ることができます。

また、当時より不慮のために貯蓄を奨励したことは、意義深いと思います。現在でも貯蓄大国日本の礎は、仏教を日本に広め国造りをした、先人たちの智慧にあるのかもしれませんが。六方礼経は、社会を穏やかにし、平和な秩序を維持するために、世尊が説かれた教えです。

## 六方を礼し、六法を護る

「では、長者の子よ、聖なる弟子は、どのように六方を保護しているのか。長者の子よ、つぎの六方を知るべきです。

東方は母父として知らねばならない

南方は師匠として知らねばならない

西方は妻子として知らねばならない

北方は友人・知己として知らねばならない

下方は使用人・僕婢として知らねばならない

上方は沙門・バラモンとして知らねばならない

(東方＝母父)

長者の子よ、五つの理由によって、子は東方に相応する母父に奉仕すべきです

- ①母父に養われた私がかれらを養う
- ②かれらの仕事を行なう
- ③家系を存続する
- ④財産を相続する
- ⑤祖霊に時に応じて供物を捧げる

と。

長者の子よ、これら五つの理由によって子に奉仕された東方である母父は、五つの理由によって、子を憐れみます。

- ①悪に入ることのを防止します
- ②善に入らせします
- ③技芸を学ばせます
- ④ふさわしい妻を迎えます
- ⑤適時に家督を相続させます

長者の子よ、これら五つの理由によって子に奉仕された東方である母父は、これら五つの理由によって、子を慈しみます。

このようにして、かれには、この東方が保護され、安全で、不安のないものになります。

(南方＝師匠)

長者の子よ、五つの理由によって、弟子は南方である師匠に奉仕すべきです。

- ①座より起立し礼をします
- ②近くに仕えます
- ③師の教えを熱心に聞きます
- ④給仕を行います
- ⑤礼儀正しく學芸を受けます

長者の子よ、これら五つの理由によって弟子に奉仕されます。また、師匠は、五つの理由によって、弟子を育てます。

- ①よく理解できるように指導します。
- ②よく学習したことを習得させます。
- ③すべての学芸・知識をよく説明します。
- ④友人・知己の中に彼のことを知らせます。
- ⑤諸方において、利益と尊敬を受けるように庇護をします。

長者の子よ、これらの五つによって、弟子に奉仕される。また、師匠は、これら五つの理由によって、弟子を愛します。このようにしたなら、かれは保護され、安全で、不安のないものになります。

(西方＝妻 [子])

長者の子よ、五つの理由によって、夫は西方である妻に奉仕すべきです。

- ①尊敬します

- ②軽蔑しません
- ③不倫をしません
- ④実権を任せます
- ⑤装飾品を与えます

長者の子よ、これら五つの理由によって夫に奉仕します。西方である妻は、五つの理由によって、夫を賞美します。

- ①仕事をよく処理します
- ②親族や周りの人々の世話します
- ③不倫がありません
- ④得られた財を保護します
- ⑤どのような用事にも巧妙であり勤勉です

長者の子よ、これら五つの理由によって夫に奉仕します。また、妻はこれら五つの理由によって、夫を賞美します。このようにして、かれには、この西方が保護され、安全で、不安のないものになります。

(北方=友人・知己)

長者の子よ、五つの理由によって、長者の子は北方である友人・知人に奉仕すべきです。

- ①物を施し与えます
- ②親しくやさしい言葉をかけます
- ③人のためにつくします
- ④協力します
- ⑤欺くことはしません

長者の子よ、これら五つの理由によって長者の子は奉仕します。また、北方である友人・知人は、五つの理由によって、長者の子を慈しみます。

- ①無気力なかれを保護します。
- ②無気力なかれの財を保護します。

- ③恐れているかれの庇護者になります。
- ④もろもろの災難に際して、見捨てません。
- ⑤かれの子孫を尊重します。

長者の子よ、これら五つの理由によって長者の子に奉仕された北方である友人・知人は、これら五つの理由によって、長者の子を慈しみます。

このようにして、かれには、この北方が保護され、安全で、不安のないものになります。

(下方＝使用人・僕婢)

長者の子よ、五つの理由によって、主人は下方である使用人・僕婢に奉仕すべきです。

- ①能力に応じて仕事を割り当てることによります。
- ②食べ物と賃金を与えます
- ③病気のときに看護します
- ④希少な珍味を分かち与えます
- ⑤適時に休息を与えます

長者の子よ、これら五つの理由によって主人に奉仕された下方である使用人・僕婢は、五つの理由によって、主人に奉仕します。

- ①主人より先に起きます
- ②主人より後に寝ます
- ③与えられたもののみを受け取ります
- ④仕事をよく行ないます
- ⑤主人の名誉・称赞・徳をひろめます

長者の子よ、これら五つの理由によって主人に奉仕された下方である使用人・僕婢は、これら五つの理由によって、主人を慈しみます。

このようにして、かれには、この下方が保護され、安全で、

不安のないものになります。

(上方＝沙門・バラモン)

長者の子よ、五つの理由によって、善家の子は上方である沙門・バラモンに奉仕すべきです。

- ①親しく思いやりの心で身体を持って奉仕します
- ②親しく思いやりの心で口業を持って奉仕します
- ③親しく思いやりの心で意業を持って奉仕します
- ④門戸を閉ざしません
- ⑤財物を与えることによります

長者の子よ、これら五つの理由によって善家の子は奉仕されず。上方である沙門・バラモンは、六つの理由によって、善家の子を慈しみます。

- ①悪を遠ざけ防止します
- ②善に入らせます
- ③善い心をもって慈しみ育てます
- ④まだ聞いていないことを聞かせます
- ⑤すでに聞いていることを明らかにさせます
- ⑥天への道を説き示します

長者の子よ、これら五つの理由によって正しい家の子に奉仕された上方である沙門・バラモンは、これら六つの理由によって、正しい家の子を慈しみます。

このようにして、かれには、この上方が保護され、安全で、不安のないものになります」と。

このように、世尊は言われた。さらに師はつぎのように言われた。

「母父は東の方角です  
師匠は南の方角です  
妻子は西の方角です  
友人・知己は北の方角です

奴隸・雑役夫は下方なり  
沙門・バラモンは上方なり  
有能な家主はこれらの方角を拝むべきである。

知識があり戒を身につけた  
柔和にして智慧があり  
謙遜にして控え目である  
そのような者は名声を得る

気力を奮い立たせ、怠ることがなく  
災いが起きても動じない  
規律正しく、智慧をそなえた  
そのような者は名声を得る

人々と親しく交わり、友を作る者は  
人を許し、もの惜しみせず  
教え示し、指導者、教導する者  
そのような者は名声を得る

布与と愛語をそなえる者  
人のためにつくす者  
世情のことに協力する者  
この人たちは世の中の愛護にて  
回転する車輪の楔の如くである

もしもこれらの愛護を行わなければ

母父は子から、尊敬も扶養も得られない  
多くの賢者はこれらの愛護を  
よく観察するゆえに  
かれらは偉大な者となり  
称賛される者となる」  
と。

このように言われると、長者の子シンガーラは、世尊につきのよう  
に申し上げた。

「世尊よ、勝れています。世尊よ、勝れています。たとえば、世尊よ、倒れたものを起こすように、隠れているものを顕かにするように、迷っている者に道を示すかのように、『眼の見える者は、さまざまな色を見るであろう』と言ひ、暗闇に明かりを掲げるかのように、そのように、世尊はさまざまな方法で、法を説いていただきました。私は、世尊に帰依し、法に帰依し、比丘僧団に帰依します。今後、私は命ある限り、世尊を帰依する信者として、受け入れてください」  
と。



## 参考文献

- |                             |       |          |
|-----------------------------|-------|----------|
| 原始仏教 第十二卷 ジンガーラ経            | 片岡一良  | 中山書房     |
| 原始仏典                        | 中村元 編 | 筑摩書房     |
| 原始仏典 ブッダのことば1<br>ジンガーラへの教え  | 田邊和子  | 講談社      |
| パーリ仏典入門                     | 片岡一良  | 大法輪閣     |
| ブッダが語る人間関係の智慧<br>六方礼経を手がかりに | 田上太秀  | 東京書籍     |
| 六方礼経                        | 中野東禅  | 四季社      |
| 六方禮経                        | 暁烏敏   | 香草舎      |
| 和訳略解 仏説尸迦羅越六方禮経             | 安田健導  |          |
| 広説仏教語大辞典                    | 中村元   | 東京書籍     |
| 総合佛教大辞典                     |       | 法蔵館      |
| 論理の構造 上                     | 中村元   | 青土社      |
| 中村元選集 二十卷<br>原始仏教から大乘仏教へ    | 中村元   | 春秋社      |
| ブッダ論理学五つの難問                 | 石飛道子  | 講談社選書メチエ |
| 仏教が生んだ日本語                   | 大谷大学編 |          |
| 日本仏教史                       | 石田瑞麿  | 岩波書店     |